

瀬戸内海から初記録のミナミイケカツオ

横川浩治・竹森弘征

ミナミイケカツオ *Scomberoides tol* (Cuvier) はスズキ目アジ科に属する中型魚である。最近、本種が瀬戸内海から採集されたが、稲葉(1963 & 1988)や清水(1997)による同海域の魚類目録には掲載されておらず、今回が初記録になると思われるので報告する。

計測、計数方法は Hubbs & Lagler (1970) およびその解釈(清水, 1995)に全面的に従った。脊椎骨の計数は軟X線写真により、腹椎骨と尾椎骨に分けて計数した。鰓耙は上枝と下枝に分けて計数し、鰓弓のちょうど屈曲部に位置する鰓耙は下枝の鰓耙数に含めた。調査した標本は大阪市立自然史博物館(OMNH)に登録、保管した。

本論に入るに先立ち、今回得られたミナミイケカツオの標本を提供して頂いた四海漁業協同組合の須藤菊正氏、および標本の公式登録を許可された大阪市立自然史博物館の波戸岡清峰氏にお礼を申し上げる。

ミナミイケカツオ

Scomberoides tol
(Cuvier, 1832)
(Fig. 1)

材 料

OMNH-P 13848、1個体、全長163.8 mm、標準体長135.6 mm、体重21.1 g、1999年12月10日14時30分頃、香川県の小豆島の北方、東経134度13分、北緯34度35分付近の海域で小型底曳網に入網。

記 載

第1背鰭7棘、第2背鰭1棘19軟条、臀鰭3棘17軟条、胸鰭18軟条、腹鰭1棘5軟条、鰓耙数6 + 18 = 24、脊椎骨数10 + 16 = 26。

全長は標準体長の120.8%、尾叉長は106.9%、前肛門長は38.0%、体高は25.7%、体幅は7.4%、尾柄高は4.5%、尾柄長は6.3%、前背鰭長は30.0%、第1背鰭最長棘長は5.9%、第2背鰭棘長は3.2%、第2背鰭最長軟条長は10.2%、臀鰭最長棘長は6.6%、臀鰭最長軟条長は5.0%、胸鰭長は12.9%、腹鰭長は10.5%、頭長は21.3%。

吻長は頭長の29.1%、眼径は26.0%、両眼間幅は28.7%、眼下幅は6.9%、上顎長は49.5%、下顎長は50.2%。

体は紡錘形で強く側扁する。尾部は長くて尾柄部は著しく細い。頭部を除く全身が非常に微細な針状の鱗で覆われる。側線は細くて肉眼では不明瞭で、後頭部の直後から始まって蛇行しながら後方へ走り、尾柄部の被鱗域終端付近で終わる。

背鰭および臀鰭の基底は非常に長く、尾柄の最も細い部分の少し前で終わる。腹鰭は胸位である。尾鰭後縁は深く二分する。背鰭、臀鰭および腹鰭の棘の強さは中程度。第1背鰭は棘条だけからなり、第1棘は左側、第2棘は右側と、以後交互に傾いている。第1背鰭の基底は溝状にくぼんでいて、鰭を閉じたときに棘条がその中へ格納される構造になっている。第2背鰭は第1背鰭とわずかに分離し、第12軟条以降の軟条は小離鰭状にそれぞれ分離している。臀鰭は、第1～2棘が分離していて、その基底は第1背鰭の場合と同様に溝状にくぼむ。臀鰭第7軟条以降の軟条は第2背鰭の場合と同様に小離鰭状にそれぞれ分離している。腹鰭は三角形で鰭条は特に伸長せず、その後端は肛門を越えない。腹鰭の基底も第1背鰭や臀鰭棘の場合と同様に溝状にくぼみ、鰭が格納されるようになっている。胸鰭は腹鰭よりも小さく、その後端は肛門を越えない。

眼はほぼ完全な円形を呈し、眼球部は平坦で全く膨出しない。眼の下縁は主上顎骨後方上縁に近接する。両眼間隔は広く、眼隔域から背鰭直前にかけての背面正中線には鋭い骨質隆起線がある。吻のほぼ中央部に2対の鼻孔があり、前後の鼻孔は相互に接近して鼻孔内部では連続する。口は大きくて上を向き、主上顎骨の後端はほぼ瞳孔の中心直下に達する。上顎と下顎はほぼ同長。両顎にはそれぞれ短くて鋭い犬歯状の歯が2列に並ぶ。

生鮮時の体色は一律に銀白色で、背

部は暗色味を帯びる。体側の背部には側線付近に沿って7～8個の不明瞭で小さな暗色斑が1列に並ぶ。標本は10%ホルマリンで固定後、80%エタノールに浸漬したが、固定後の体色も生鮮時とほとんど変化がなかった。

生息状況

瀬戸内海における生息状況については不明。後述する本種の分布域から、本種は西太平洋、インド洋の熱帯～亜熱帯域に分布の中心を持つ暖海性種と考えられ、冬季の最低水温が7℃台まで低下する瀬戸内海に常在種として生息しているとは極めて考えにくい。さらに、はじめに述べたようにこれまで瀬戸内海から本種の記録がなかったことからしても、今回の個体は何らかの原因により本来の生息域から瀬戸内海に迷い込んだ遇来種とみるのが自然ではないかと思われる。

最近瀬戸内海には、本来分布していない暖海性生物の出現が相次いで報告されている(横川・安部, 2000)。このような現象は夏季に高温高塩分のために瀬戸内海が外海的な環境になり、潮流によって外海から遊泳性魚類が偶発的に輸送されるか、あるいは同様に輸送された底生生物の幼生が生残して発育することによって考えられている(鍋島・西座, 1996)。今回得られたミナミイケカツオもそのようにして瀬戸内海に遇来したものと推察される。今回の個体が得られたときの漁獲場所の底層水温はおよそ16℃であり、後述する本種の分布域から考えると、本種が生息できる臨界水温に近かったものと推測される。

分 布

本種は本州中部(三重県)以南の西太平洋およびインド洋に広く分布し(具志堅, 1984; 阿部, 1987; 望月, 1995; 木村, 1997)、日本は分布の北限と考えられる。

備 考

本種は同属のイケカツオ *S. lysan* (Forsskål, 1775) に似るが、口の後端



Fig. 1. 瀬戸内海から得られたミナミイケカツオ. Needlescaled queenfish *Scomberoides tol*, OMNH-P 13848, 163.8 mm TL, 135.6 mm SL, from the Seto Inland Sea.

が瞳孔の直下で終わること（イケカツオでは眼の後縁下に達する）、および体側の斑紋が1列であること（イケカツオでは2列）で区別される（瀬能, 1993）。また、同じく同属のオオクチイケカツオ *S. commersonnianus* Lacepède, 1801とは、口の後端が瞳孔の直下で終わること（オオクチイケカツオでは眼の後縁下より後方に達する）で区別される（松原, 1955; 阿部, 1987; 本村ほか, 1998）。

生態的には、通常沿岸の表層に小群をつくって生活し、魚類や甲殻類を捕食する（木村, 1997）。日本では本種の幼魚はイケカツオに比べて少なく、食用となる（木村, 1997）。

引用文献

阿部宗明監修. 1987. 原色魚類大図鑑. 46 + 1029 pp. 北隆館, 東京.
具志堅宗弘. 1984. ミナミイケカツオ. Page 149, pl. 137-C in 益田 一・尼岡邦夫・荒賀忠一・上野輝彌・吉野哲夫編. 日本産魚類大図鑑. 東海大学出版会, 東京.

Hubbs, C. L. & K. F. Lagler. 1970. Fishes of the Great Lakes Region, 3rd ed. xv + 213 pp., 44 pls. Univ. Michigan Press, Ann Arbor.
稲葉明彦. 1963. 瀬戸内海の生物相. 352 pp., 6 pls. 向島臨海実験所, 広島.
稲葉明彦. 1988. 増補改訂瀬戸内海の生物相II. 475 pp. 向島臨海実験所, 広島.
木村清志. 1997. ミナミイケカツオ. Page 312 in 岡村 収・尼岡邦夫編・監修. 日本の海水魚. 山と溪谷社, 東京.
松原喜代松. 1955. 魚類の形態と検索 I-III. xii + 790 pp., vi + 791-1605 pp., xiv + 135 pls. 石崎書店, 東京.
望月賢二. 1995. ミナミイケカツオ. Page 322 in 小西英人編. 新さかな大図鑑. 週刊釣りセンター, 大阪.
本村浩之・岩槻幸雄・吉野哲夫・木村清志・稲村 修. 1998. オオクチイケカツオ *Scomberoides commersonnianus* の日本からの初記録. 魚類学雑誌, 45(2): 101-105.
鍋島靖信・西座真二. 1996. 大阪湾におけるメナガガザミ・ケブカツノガニなどの外海生物の出現と1994年の高水温と高塩分の影響(2). Nature Study, 42(7): 3-5.
瀬能 宏. 1993. アジ科. Pages 690-705, 1318-1320 in 中坊徹次編. 日本産魚類検索: 全種の同定. 東海大学出版会, 東京.
清水孝昭. 1997. 瀬戸内海産魚類目録. Pages 87-94 in 池原宏二編. 瀬戸内海のさかな. 瀬戸内海水産開発協議会, 神戸.

清水 長. 1995. 魚類の計測方法と用語の共通性について. 魚類学雑誌, 42(1): 98-102.
横川浩治・安部享利. 2000. 瀬戸内海から初記録のテングダイ. 伊豆海洋公園通信, 11(1): 5-7.

(よこがわこうじ・たけもりひろゆき: 香川県水産試験場)

Abstract

First record of needlescaled queenfish *Scomberoides tol* from the Seto Inland Sea, Japan

Kōji Yokogawa & Hiroyuki Takemori
(Kagawa Prefectural Fisheries Experimental Station, 75-5 Yashimahigashimachi, Takamatsu, Kagawa 761-0111, Japan [E-mail: yokogawa@shikoku.ne.jp])

Needlescaled queenfish *Scomberoides tol* (Cuvier, 1832), Carangidae, was first recorded from the Seto Inland Sea. One young individual of *S. tol* was caught by trawling at off Shodo Island, located in eastern part of the Seto Inland Sea in December of 1999. Since distribution of this species makes regard it as a warm water species, the obtained specimen might enter the Seto Inland Sea by chance.